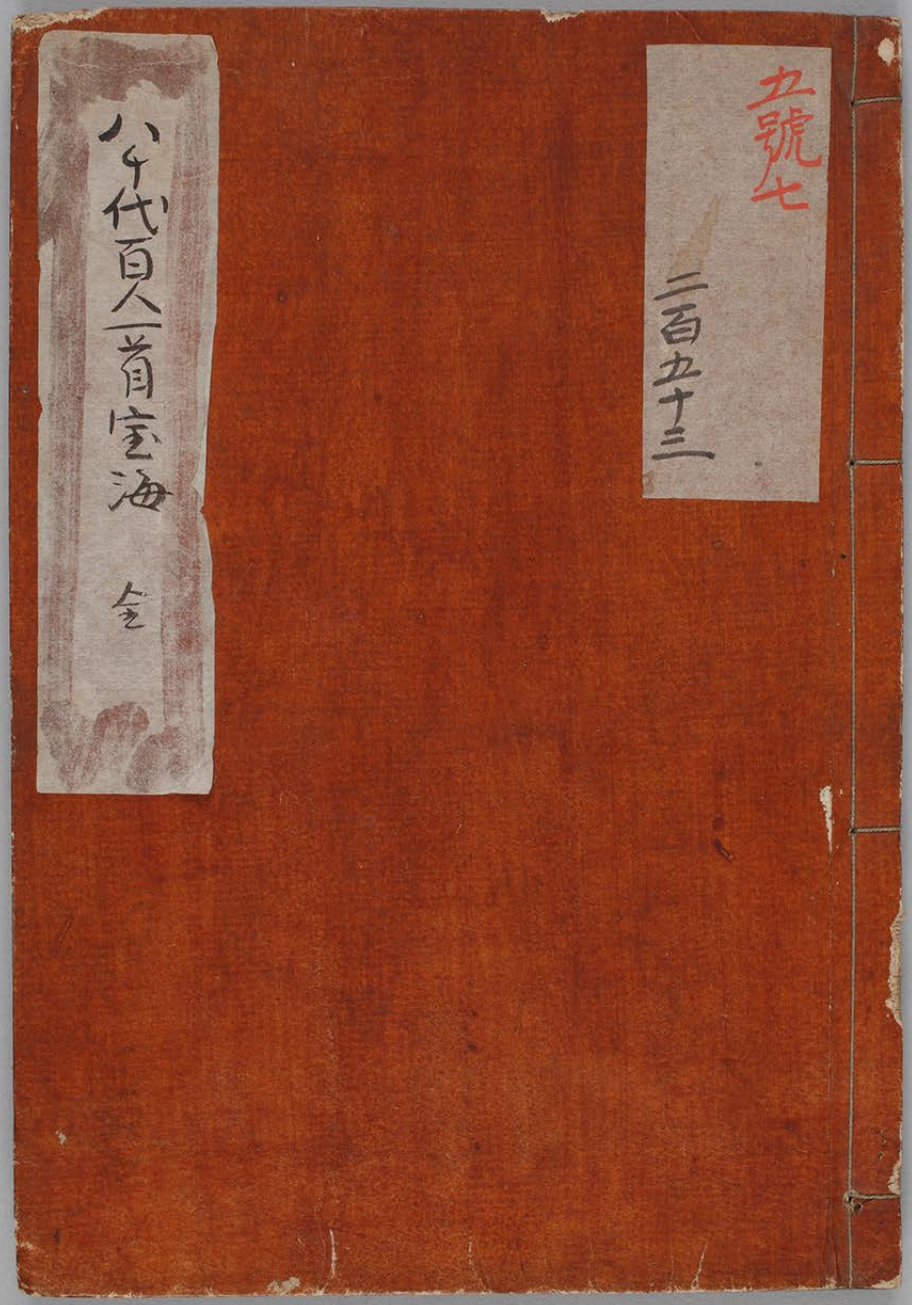


八千代百人一首宝海　全

九號七
二百九十三

天明
新刻

八千代百人一首宝海

全

徳

徳言功容の
四つとは女の口徳と
いふまでもなく貞節の
ことなり

そもそもあまよ孝行あつく
まことにてぶじにかりにも我
まことにつまらぬ嬉丸の
はつかしなんとて年ゆ明ま
ろあるべきいつまでふ
こといふもそもそもまた
とてあさましくふんぬ
まあやまりにしぶ女ハ
世よ稀也まをろうめ始まあく
あるうぶさうひつまよ之ぞ一門他人の
あざとり紙もうつみずぼあるべ
アんぶろ世ふぶ世ありを
ことにまて女い孝行あつく
まをとうやまふべきなんと

言

言とハ
つまふ抱じーやとく
りとすくすぶさと一
えのいつまで
なんとかとう迎いかへより口紙
守ることハ難れぶしとて
服さくぐりひいえす
ありもはより あもたハ公ハ
おとけねをとうとに清文女ハふ
あさくりあとこもまでも。
くふのさんぐりにく。
人よさみーらんぐりく
まで世ぶんぐりこと
はをそーしてぐらひの
生りつまりくおくべさ
うまで一なり。ねいつまで
そくなくんぐをのぐらふ
おさまりてぶまんを
くらも

切

切とは糸ぬいおうこと。

まづ糸いつぱい。細なる女はこと下女はけんれいやきはぎこちろうえてかこころびいつぱいこまこちねもあるもたらねもひきこと女はいをおさひるゆめうれいこれ合和よろづ部四のつぎをよくあべやつこ人くにもいひたろ式なこそこにひのにを下さはうはぜこいろこちこぶうれんてんよ。ものをたろうもまこ。

容

容とは女のすがたのやふぶり。

かねをいつも。おさこあにもかくうこあれば。身はいやくうこあれば。つよみんどもろうみ。身をこれいうたるべーそなる。衣服髪のゆいぶりは姫女うたてあるみーきも。ゆこひいやこき賤の女なりこも月花みちろうとーもうるた。京都ぶりにもこうしい。やさーたおろうぐれめりくこあるんばひくりこころざーをたくぶをもんぜりのつべーこれを女の四徳といも

常木夜雨
須磨秋月
小松中に
乙女の
初鶴
萩の
夕雲夕照

明石晩鐘

秋の夜は月ぎろ
みはよ
我こころふ
ちゝ丹紙
ゆ
ゆのもも
ろ人舞

松風帰帆

かのきしに
ゆくるふ
ゆくしら秋の
うもき
しほ
あだうろ
かろふ

琴

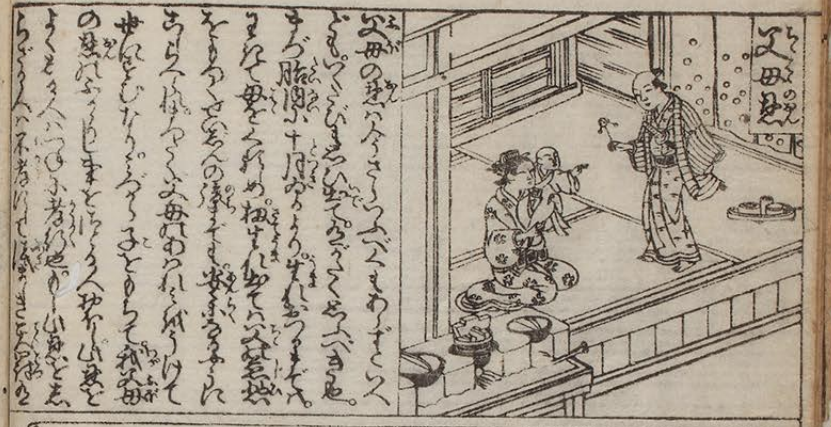
夕ぐれは
物思ひ人
宿の
琴のね
なげさ
くるふ
松の秋ろ舞

碁

ひと人の
をみえ
くらし
いふへ
かくし
ろき
ほをやろくけき

風土記

風土の記とい天地ろ見ひつ巻ん一四の万わい国地ろ見て天ろ巻ろ一四の万わい国地ろ見て天ろ巻ろ一四の万わい国地ろ見て天ろ巻ろ



持統天皇
春すぎて夏
来にけらし
白たへの
衣ほすてふ
天の香
ぐ山

猿丸大夫
奥山に
紅葉ふみ
分け
なく鹿の
こえきく
時ぞ
秋は
かなしき

女教そしは草

いとや女の身ほうこうをつけくしぬぎ
ちゃくしをかきわるをそうりかま
すぐしの海のいろとくもぞろとそ
ゆそそ〻ぶしまぐむぐまーうに
わ松うーずぞれあをやゆあるる
まーべーそで身をたーあるとん
ぶにぐぐたーうわーのわ〻ゆよ
いるまぞさるるぷぷるぷ身にを
わるつけどうんろく身をちろく
うちふやるるをを女るしいふるあの
ようそそもびさんた女はんぐぶんん。
そそちろはんををびどけーちの
ぷーど。髪をばうべーうあんりす
るよぼゆゆんなくきうあるつける
きりの松ぐるるとと。髪にをなるだ
ゆ。ぐ〻るのーりーりのるしばい
くゆをるひてるるーあるーあるひぐ
ぬとうんそだ。ぐいるしきゆんり。

大ぐゝゆんいできくゝ糸もむさ
くなるりのうりな残くんをつけ
うあぐ〻男へぶれ半にんぐうり。
粧風のぐうりの巻ぐたておさるた
うもちつけんようもいぐくるき付
ちもぬやうるふけるるるとはこ。
人れ云筆にをぐひ拾ひのたも。安ろ
すぐさぐのこりてあをひ目にてさ
きにあるようれをおーき女のまま
をせと。男れぶたちうーに女の

中にも和やかなるやうなれども。
をのづから気乗の風流。和てるゝひと
ぶしなるべし。まづ歌びやうぶ。それが
よろづの男子の心ばえとりのをう
ぬ男は和らかにて。和歌をもつ
きまなびとりの。女筆紙なぐふ
むらひても。同くのごとしもつぱら
とし。歌にちからをきわひても。たゞり
すみやかにふねのあひもを残くるう。
あるひはりのとけこさするも。和のまな
をおろそかにもつ。ふかどとゝやさしき
業も。和を学ぶぬ男はふつゝにて
まるべきことすべくとしても。まみひ
ゝりのうたはにうつまを男のとれ
たるうれしおろをそめてみるひ
ものべ。ねさしとゝるまいもの
しの人はうあをもうまひ人
のゆがうするおろかもそれ和て
とゝをゆりひ物くあるもうそ。
ての心はあるりふいろんをのるも。

下くにもつけしもたれも。かのひ
ゝとゝめりのもそれとても女のこの
ちうぶれいこ男子。みさをしとゝる
とそも。ろくとこのむこうんどいり
にもよにふれかまーちるほー
うんだあく。ゆすみそあいろく。
人はかこれもつにそのおくにそむ
ねうれいぶくもおそれるべーみよ
ゝうそ。ハ伝くそまづやまこふぼ。女
四書。女仁義ねうゝ。のるべいい

中納言家持

鶯の
なくなる
春の
ものうさを
夜を更かすなる

安倍仲麿

天の原
ふりさけ
みれば
春日なる
みかさの山に
出し月かも

表撰法師
小野小町

蟬丸
春雄堂

僧正遍昭
天津風
雲の
かよひ路
吹とぢよ
をとめの
姿しばしとゞめむ
陽成院
筆の
跡
見ふの川
玉ぞ
つりける
淵とぞなる

なるハあさましき世ハ夢ハせざれども其に
よりけるもようとんの姫べ。ぞうの
あのそれいひろさ紙をぞ。ぞうき
うしいふくきもわそれもうやう
けは。ぞ。ぞ。ぞ

中納言
豆別
いるぐの
ひろ
松
今
神代
きるば
ちはや振

機
糸
錦
綿
帯
羅紗
羅紗織行相伝
伊勢の国の
帯ふる
人や
美乃の
人めぐら
伊勢
羅紗
かき
あの
梅乃
あ
この
を

元良親王
素性法師

枕

燈

杖

筆

硯

文字

文書

薬

灯

三條右大臣

玉
碇
網
貞徳
小倉山
峯の
もみぢ
紫
ちるあらば
今ひとたびの
御幸まつさん
中納言兼輔
月やの原
ちるく
紅葉
いづみ川
いぼきき
ちひろうん

源宗于朝臣
山里は
冬ぞ
さびし
ゆきふる
人めも草も
かれぬと思へば
元の河内守頼
さくらあるくよ
おくやま
おれん
くれ葉の
をれまどろせる
さくらぎくの花

壬生忠岑
有明の
はまぐ
みし
まうき
あるけき
くるまは
うさわいなし
坂上是則
白雪の
みわたす
の月と
見まがふ
ばかりに
ふれる
雪かな

素戔嗚尊
紀友則

菅原眞風
誰をしる
人よ
えの
松も
枯
あるべし

紀貫之
人をいさ
心も
おぼえ
花ぞ
むかしの
香に匂ひける

清水源吉
夏濃夜は
ほゝ青
ゝ明ねを
ゝ
身やゝ

久屋胡康
秋乃郭
ねとあ

右近
人のうらもみ

清原元輔
なごりをしさ
のこるとは
ちぎりきな
かたみに
袖を
しぼるとは

中納言敦忠
逢ひみての
のちの
こころに
くらべては
むかしは
ものを
おもはざりけり

中納言胡忠
謹徳公

曾孫ね忠
仲良乃
を
波ふ
為人
四ら
をを
り来も
知れ
恵れ乃ら邪

東慶法師
いを薄
ちをれる
岩の
けびしき
人をんな
秋も来ぬ

源重之
風をいたみ
岩うつ
波くだけて
物をこそ
思へ
中将宣方朝臣
御堀守
清士丸
あさぼらけ
有明の
月と
見るまで
吉野の
里に
降
雪

藤原義孝
天つのゐ
ゆふ
ざるし
命さへ
なくも
がと
おもひ
くれ
藤原実方朝臣
ひくとこふ
えやは
いぶきの
ひも
さしを
もえぬ
ものかは

在原業平朝臣
明けぬれば
くるるものとは
知りながら
なほうらめしき
あさぼらけかな
右大将道綱母
歌をつくり
ねる夜の
ゆめは
いと久
しきものと
なりにける

高しの
り末を
うゝれど
をつを
ゆゝぎりの
命ともぶる
俊岡二月毋
大納言公任
瀧乃白
絶ゝく
久
しく
なるねを
ゝ
あこうるぶを
なを聞へ

あさん
世乃
和の
出よ
そてるひも
あるこころか
和泉式部
和泉式部
わかれ
夜半の
月かな

大武三位
有るム
いるの
さる原
風吹ば
いぐうよ
人を
ちまま
赤漆多つん
ゆとゝゝく
ゝゝく
ゝゝく
ゝゝく
ゝゝく

大江の
つなぬの
乃
をれい
まぐ
ふと
天のうら五
小式部内侍
伊勢大輔
古への
奈ら
都
八重
桜
九ふ
み重
白
ひ
ねる

夜
清少納言
左京大夫道雅
今はたゞ
おもひ絶
えんとぞ
思ふ
人ばゝ
いかもがな

相模
うらみまくびかさね神さよ
有わを
ちるよくちるん
ちるとも
おもと

お大僧ぶるる
山椒
用心侍
恵の秋九

二條院
仙洞
後鳥羽
後堀河
後嵯峨
後深草
後宇多
後伏見
後醍醐
後光厳
後円融
後小松
後花園
後土御門
後柏原
後奈良
後陽成
後水尾
後光明
後西
霊元
東山
中御門
桜町
桃園
後桜町
後桃園
光格
仁孝
孝明
明治

教訓伊呂波秋
武遍法師
大和言種伝

波　はぢをもれ
そぢをくゆまずに
をもおぢはあしれ

仁　にんぜんとあくとは
ちりのあくまふ
人のちりう

保　ほうこうはげの身の
そあれちりうを
人のうちう
ちりとなる

急　ぐくもの人もおのが
ぐくなる人のまれは
あくれをうの人

登　とぢの人くなぐは
あびきめ　むやく
ぐりの人かれ
ちりのぐう

知　ちづきんようれは
ものちりくをうり
さそうの人は
ものくれく人

利　りひの人くれは
まけしをや
人のあつひ　ちりれ
きけや身れく人

奴　ぬの身を日ろう
ちくびを　くうよ
まんきは
ふせぐれゆなり

留　るうつうれ人を
わくせ　ゆりるよ
そぐくの人く
ちく身世のり

遠　をいの身はくやん
ちまふ　くやせ
くや日のくれは
へあひのうよ

和　つゞみをば　まれびと　作りたるべき
我くわんぜて　つまたれ　わ〜へよ

賀　かきうの　ふまに　筆
いれてみよ　おのゞ　ものうたあり

与　よくゆよ　人をも　世とも
ゐつらつぞ　くるせや
くれせよ　くせいろの

多　くゐあるも
よくみぐねいらは
ろくもくげへ
むとこそ　これ

礼　れいちもんみつを
おのくい　人が
人といいえど　身のく

源後頼朝卿

うゆうろ
人を
初洲
ろ
山打洲
くもそ　ゐまとこい
いのくねゐを

冒　くれぞ〜人のうげと
ろくこちい
いくねゐ　ぞうや
はゆよくゐ　みゆ

津　つのくれなゐあくに　つまて
人ごいくぐ
めろゐをくう

年　ねんまたい　ゐ紙も
ゐすぐいくぐ
くくりゐせん

素　なくれのをちぐこと
くゐくゐの　ゐ紙もて
ゐぐをく
人ぞゐろ　成くう

良　らくごのくゐゐの
ゆぐりとゐのむ人
らんのりくと
ゐくくゐべー

藤原基俊

契をれ
くゐし
りの
恋を
命
あくゐ
ゐくくゐ
れもいねゐの

亥
宇
爲
農
枯
久
也
滋
計
不
崇徳院

古

うしろこそ世をさきどりの
なれるもうしろうしろ
いかゆうしろふ

依

常ゆえ世を渡るも
よしはろ
ろあるひとのあのりもみも

天

天たかはこそ紙てに
そそふなりくで
ふでをりうにせよ

安

あてもようこをも
いでいひそそん
ありくうろ
人のもろろ紙

左

さけふくでのまつ
ゆくよいゆーやり
のまれぬもくば
のりや身はく

源義昌

漢洒鴻

ふ

秀

の

ゆく変

よ

賞秋

祇園

須磨の実守

織

まぶ世のはなを
おそれてしらは
ふれ世のゆも
まみーのれ

由

ゆくあゆん雨を
ちあれく
よぶもゆく
よぶもゆ

面

ゆ紙あそ
ぐなるろを
ゆをばふまちり
身のあとにぐら
ふどめを

冥

ふどめを
ひくどんよく
極このむ人
ちまろをばなりなどは
うれそそも
ぎりわうるくば

志

せよ
うくあ身のく

九京大夫張補

秋の月よ

そそぐ

雲の

絶ろう

りを出る

月の

新のそあ年山

恵
比
毛
世
す
あらを
もも
知を
くろ
の
ひとれくさい
物をこそ
侍賢門院
後徳大寺
わすれぎた
なるを
すむしぎ
只有明の
月そのこれる
洗物
干物

乃園を師
なりし後
さても
命を
あるわを
うきよ
なみと成り
世乃中よ
こころそ
をけ
き
なりし
山の風うも
庵をまる

さて中ぜめとりぐんのこうりんにてめうどん
おわるゆと合へてめしは○こび茶の
そめこうりゆ。かりて二ぐんそめそこん
とりぐんのけぶだゆと二合めうどんおつ
へそめしは○茶ぐちのそめえいりぐん
にて二ぐんそめさしおるものちうめう
ぐんとだゆとおへそめしは○しのちや
の茶えいりぐんのこうりんにて二ぐん茶
中ぐちいりぐんのけぶだゆ。ゆかぐん
おへそめしは○りんきのそめこうりん
下地とえいろにてめうりきとのせんど
こうりんにて二ぐんそめぐのみよりや
きのせんどはめうえんとおくりんそめ
しは○だゆのせんどりんきてつ
のせんぐんぐあそめんぐの二ぶぶすゆ合へ
八合にせんどめぶちゆとはつうひゑべ
ゑもぐゆかくきこんそいろのぐす
くいくちあもゆとりにそめ
てゆすもおいゆにもさてちぐ
さみにはのたまへきちり

まろうぬきひろゆのたちやぶんと
二つ〜ちぶと月ぶんの人ぶぼんと
ろぶんそでぶりおくびてろやそぶに
ひろりゆふぐちゆぶをびきぐけよ
たちぶおろ〜ちぶびぶろりぶろりとろ
ゆぶそみそをちいろせぶちぶんと。
ちりめんのだちれいぶゆそとそのすす
くさのふとれそでとつけてぶきまろ
ろりとれとゆよおよりおびとりぐ
しつぐせようろそりめるゑびぬ。

西行法師
なにをか
月は
をしみ
ものを
ちるを
ちるを
花の
ひかりかな
蓮法師
村雨の
ゆく
雲
桂の
ゆく
雲
のゆく
夕暮

式子内親王
玉の緒よ
絶えなば
絶へ
ねとぞ
思ふ

心の丹法

心の所とはいふるもの心を所とする事なれどいつぐの心なくそうえたものにてぞろ時は心のそなはりゆゑなどくぞつする時はあきらかとえつぞのがれい世のよくをしびそむしびみるんのゆにもおきすぐそとりぬまに成る時ぐをあり法をけぐ一法をあろ所いのちとしまずとりて信敬よいぶやをえ三くい法めをれ仏ようえ戒とかしへて

ぞ一ぬうりぐくい生るのちくくい人すぐれぐ人のろゆをぐどこのゆるふくろとうけ生にをぐつをこ法ぐこれをりていくあつる生るもこれいうみてぐなをぐひのろれて仏のすくにもおぐ法ぐつのれくぐ戒のおきそもぐの生るをこのすきあのくりのぐくくぐつのどぐそれの意いのうをぐおぐ法ひきつくくうもつくくくるぐこぐぐるのるいおぐ法くろ矢をとりておくすぐこをもくろ地ともけくぐ人のふくろくぐぐおをう川のちせさぐまねりのれいおなくいぐくぬゆつぐよいゆくるくろくう風のゆくをもをぬいさくれいの人のぐどぐくぐくにしべぐほとのろくうこれをいくぐおろいりとこれさよくれぐぬゆよられてうろうゆをくけくれぐとくぐくこれをにくぐさまくぐるくずまゆをひそひるくるを

海霧を指法大法

蒼ゆや
霜
天の
さゆくろ
ゆくくき
ひくゆも神

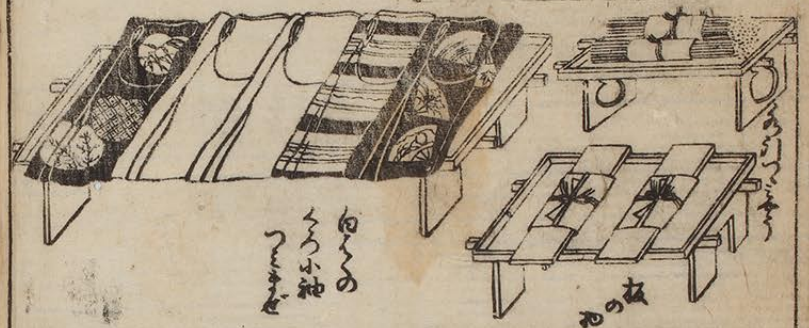
二條院讃岐

参議雅平
人丸の
梅風
さくら更て
古りさむく
哀うんなり

僧正遍昭
花の姿
うきよ
世の
民よ
花の
我らが
墨染の袖

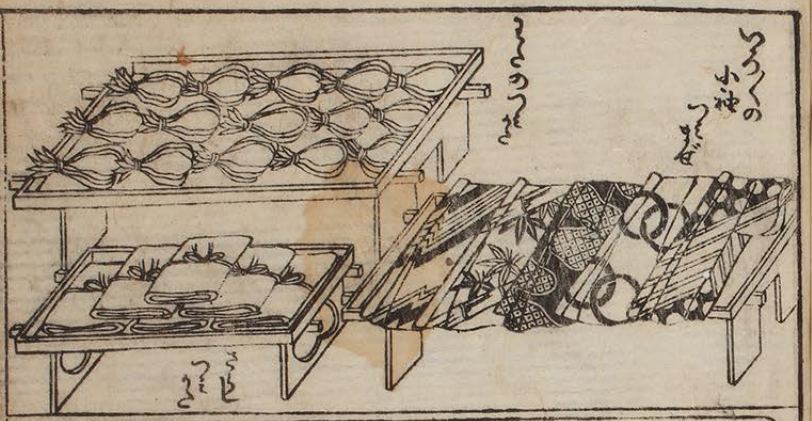
世の人のうてうなるぶんにては
それをぶつやうなるぶんをゆべし
おちく紙のうことも考へねそびん人い
ひろうげうとんゆうそれ
ちくそいつも公紙をくべし
ゑまうりていあまりもの
ゑやく書けれてひろふこと
あまりなぶぬい人そふなり
なぐく世の人をそあにるるいい
にりうびまんよまちびとうる
ちうげんのにきふいであいき事
いそねぶうみそうくゑあ
りうに人をそにをきあまりん
ちくばかきいさーいるくる
ゑぶん芸にゑのつくもすくれ
ちあそいいゑ事乃れなり
うぶさそのあむさにゑみぶんてと
女乃ちろあくなるぶさ
ひるさ伝さ人風乃まるれど
ちくろあるゑい世にちくく

女中進物積方



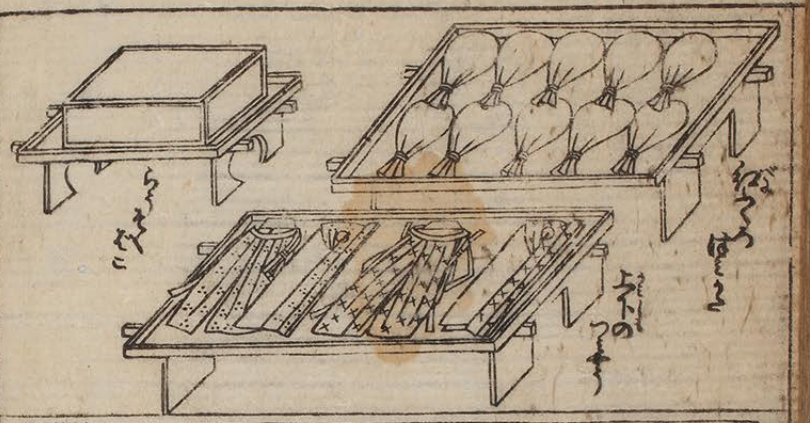
正三位家隆

風はらぐ
ふるれ
小しの
乃
ゆふぐれは
みりさえて
夏の来りけり



源頼政

人を
おも
人もうら
めし
あらぢ
さく
世を
恨り
山へ
ゆ
ハ



大坂ミ分

六月十二日
十六日
十八日
十七日
廿一日
廿二日
廿四日
廿八日
廿九日

十干
甲乙丙丁戊己庚辛壬癸

十二支
子丑寅卯辰巳午未
申酉戌亥

撰者　皇都　隨時老人
畫工　花洛　西川氏
画師　武江　石川豊信

明和六年八月吉日
寛政四補刻

皇都書肆
林　權兵衛
林　伊兵衛
石田善藏
西村平八
武村嘉兵衛

44297

x·rite ColorChecker® Color Rendition Chart